



展覧会名	ペーター・フィッシュリ ダヴィッド・ヴァイス		
英文名	Peter Fischli David Weiss		
会期	2010年9月18日(土) → 12月25日(土) ◎ 開場時間 10時～18時(金・土曜日は20時まで)チケットの販売は閉場30分前まで ◎ 閉場日 月曜日(9月20日、10月11日、11月22日は開場)、9月21日、10月12日、11月24日		
料金	一般1,000円(800円) / 大学生800円(600円) / 小中高生400円(300円) / 65歳以上の方800円 ※()内は団体料金(20名以上)及び前売りチケット料金		
会場	金沢21世紀美術館 (7展示室/ 約1,000㎡)	出品点数	約70～80点(約200オブジェ)
主催	金沢21世紀美術館 [(財)金沢芸術創造財団]		
共催	読売新聞東京本社北陸支社、美術館連絡協議会		
後援	スイス大使館		
助成	スイス・プロ・ヘルヴェティア文化財団		
協賛	ライオン、清水建設、大日本印刷		
協力	ルフトハンザ カーゴ AG、カトーレック株式会社、NECディスプレイソリューションズ、Ufer! Art Documentary		
お問い合わせ	金沢21世紀美術館 TEL 076-220-2800		

本資料に関する
お問い合わせ

金沢21世紀美術館 展覧会担当/北出 広報担当/落合・沢井
〒920-8509 金沢市広坂1-2-1
TEL 076-220-2814 FAX 076-220-2806
<http://www.kanazawa21.jp> E-mail: press@kanazawa21.jp



展覧会について

光と色が移ろいゆく果てしないトンネルの行程。ネズミとクマは街に繰り出し、芸術や哲学を通して人間社会の不条理を見つめる。身の回りの物たちは危ういバランスを保ち佇む。即興的な連鎖反応を繰り返しながら、一つのガラクタからもう一つのガラクタへと辛うじて伝わるエネルギー。約90点の粘土が象る大小様々なこの世の出来事が織りなすパノラマの傍らには、世界各地の空港の風景が浮遊する。人生や世界について誰もがふと思いつくかべそうな問いが現れては消え、止むことなく空中を漂う。小さなモノクロ写真にはおとぎ話のような光景が黒く柔らかな輪郭で映る。平穏で何気ない日常は、驚異と混沌、悲劇と喜劇、憂鬱と虚無に満ちている…

ペーター・フィッシュリとダヴィッド・ヴァイスは写真、立体、映像など様々なメディアを柔軟に操り、身近な光景や事物に真摯な眼差しを向け、意味のずれや解釈の多様さを綿密な計画と偶然性によって提示し、皮肉とユーモアを織り交ぜながら人間社会の本質を浮き彫りにします。独自の美学に貫かれた彼らの表現の妙と百科全書的世界をお楽しみください。

展覧会の特徴

1. 現代美術をリードするアーティストによるアジア初の個展

ペーター・フィッシュリとダヴィッド・ヴァイスの作品は、まとまった形で展示されたことは、国内はもとよりアジア全域を含めてもこれまでありませんでした。今回の金沢での展覧会が、日本では初の大規模な個展であり、かつアジアでも初めての企画となります。

2. 重層的に織り重なり拡張する百科全書的世界

写真、映像、立体、インスタレーション、ドローイング、本等様々なメディアを柔軟に操るペーター・フィッシュリとダヴィッド・ヴァイスは、身近な光景や事物に真摯な眼差しをむけ、独自の視点を以て日常の美しさを表現し、私たちを取り囲む環境に新鮮な価値を提示します。個人の生活の一場面や些細な事柄から人類及び地球上の史実、日々ふと頭に浮かぶ事柄から人間社会の深層心理、ものごとの対極にあるもの等を一同に網羅する試みは、アーティストが費やす膨大な時間と姿勢の集積でもあります。秩序と混沌が織りなす主観的な百科全書的世界だからこそ、観るものに常に開かれているのです。

3. 世界が注目する作品の新バージョンや新作が登場

1981年の初個展にて発表、一躍彼らの名を世界へ馳せることとなった作品《不意に目の前が開けて》の新バージョンが2006年に制作され、今回展示されます。またヴェネチア・ビエンナーレで金獅子賞を受賞した《無題(質問)》は、本展覧会に併せたテキストと日本語に置き換えた新しいインスタレーション《質問》として展開します。最も新しいペーター・フィッシュリとダヴィッド・ヴァイスの作品が金沢に集まります。

関連企画

ペーター・フィッシュリ ダヴィッド・ヴァイス

「アーティストに質問する」—作家への質問形式のトークです。

[日時] 9月18日(土) 15:00～16:00 (予定) [会場] 金沢21世紀美術館 レクチャーホール

[料金] 無料(ただし、当日の本展観覧券が必要)

[定員] 70名(当日午前10時よりレクチャーホール前にて整理券を配布いたします。)

※事前に展覧会をご鑑賞ください。

学芸員によるギャラリー・トーク

[日時] 10月22日(金) 18:30～19:30

11月27日(土) 16:00～17:00

12月23日(木・祝) 14:00～15:00

[集合場所] 金沢21世紀美術館 レクチャーホール

[料金] 無料(ただし、当日の本展観覧券が必要)

作家プロフィール

ペーター・フィッシュリ (1952-)

ダヴィッド・ヴァイス (1946-)

1970年後半、アーティスト、ウルス・ルツィティとの交流や、当時チューリヒのアートシーンにおいて中心的な場であったバー「コンティキ」等を通じて親交を深める。1979年、ソーセージやハムで日常を再現し写真に撮った風景画「ソーセージ・シリーズ」を、1981年、自らネズミとクマに扮し、社会システムの矛盾を暴き、自らの秩序を構築しようとする映像作品《ゆずれない事》、冊子《秩序と清潔さ》を制作。以降、様々なメディアを柔軟に操り、「日常」をテーマに制作を続けている。ひとつのシリーズ、モチーフに膨大な時間が費やされる表現には、極大と極小、平凡と非凡、道理と不条理、秩序と無秩序が混在し、新たな世界像が提示される。社会や人間の本性を突きながら、ユーモアにあふれる彼らの表現は国際的に高く評価され、《事の次第》を発表した1987年ドクメンタ8、トータルで90時間にも及ぶ映像を12台のモニターに展開した《無題》を発表した1995年ヴェネチア・ビエンナーレをはじめ、多くの国際展に参加。そして2003年ヴェネチア・ビエンナーレで発表した《無題(質問)》で金獅子賞受賞。近年では、2006年チューリヒ美術館とテート・モダンの共同企画による回顧展「Flowers & Questions」、2009年レイナ・ソフィア国立美術館で開催された個展「Are Animal People?」を開催。またスイスの報道会社Ringer社のアニュアル・レポートのアーティスト・ページのコミッションから発展した、800枚の広告コピーから成る作品《太陽、月、そして星々》を2008年に発表。世代を超えて多くのアーティストに多大な影響を与えている。



photograph © Walter Pfeiffer

ペーター・フィッシュリ (Peter FISCHLI)

1952年 チューリヒ生まれ
 1976年 ウルビーノ美術学校卒業
 1977年 ポローニャ美術学校卒業
 1978年 グループ展(ポローニャ美術学校/ポローニャ)
 1979年 ダヴィッド・ヴァイスと初めて共同で制作(写真作品「ソーセージ・シリーズ」)
 1981年 グループ展「Bilder」(ヴィンタートゥール美術館)
 現在、チューリヒ在住

ダヴィッド・ヴァイス (David WEISS)

1946年 チューリヒ生まれ
 1964年 チューリヒ美術学校卒業
 1965年 バーゼル美術学校彫刻コース卒業
 1970年 「スケッチ」展(ウルス・ルツィティとともに)Edition Toni Gerber(ベルン)
 1974年 個展「Drei Geschichten」(Edition Stähli/ チューリヒ)
 1975年 個展「Upand Down Town」(Edition Stähli/ チューリヒ)
 グループ展「The Desert is Across the Street」(ウルス・ルツィティ、エルケ・キルガとともに)
 (Galerie Stähli/ チューリヒ)
 1976年 個展(Galerie Stähli/ チューリヒ)
 1979年 個展(Galerie Gugu Ernesto/ ケルン)
 1979年 ペーター・フィッシュリと初めて共同で制作(写真作品「ソーセージ・シリーズ」)
 1981年 グループ展「Bilder」(ヴィンタートゥール美術館)
 現在、チューリヒ在住

展示作品・
シリーズについて

広報用に*印の作品画像の提供が可能です。

<使用条件> ご希望の方は下記をお読みの上、広報室までお問い合わせください。

※広報用画像の掲載にはいずれも下記クレジットの明記が必要です。各画像のキャプションとともに必ずご表示ください。

© The artists.

Courtesy The artists; Galerie Eva Presenhuber, Zürich; Sprüth Magers Berlin/ London; Matthew Marks Gallery, New York

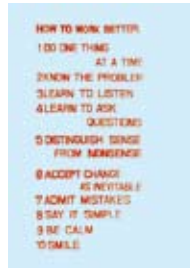
※トリミングをご遠慮ください。キャプション等の文字が画像にかぶらないよう、レイアウトにご配慮ください。

※情報確認のため、ご掲載の際は恐れ入りますが校正の段階で広報室までご連絡ください。

※掲載誌(紙)、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。

入口付近ほか

《より良く働くために》



ある会社に掲げられていた働くための心構えの10箇条。限定された場所と目的から解放され、紙上にレイアウトされ貼られることにより、「人の話をきくこと(LEARN TO LISTEN)」「笑顔で(SMILE)」といった言葉の持つ意味はより普遍性を帯び、観る者一人一人の心に響く。

1*
《より良く働くために》1992
ポスター
H149.8 x W103 cm

展示室 7-8

《パラッツォ・リッタでの
カナルヴィデオ》



観る者を無意識の領域に導くかのように延々と映し出されるトンネル。時に赤や黄色、そして白光に包まれる幻想的世界。実際は、チューリヒの下水管。

2,3,4*
参考写真
《カナルヴィデオ》1992
ビデオ 60分10秒
ビデオ・スチル

展示室 7-8

《子猫》

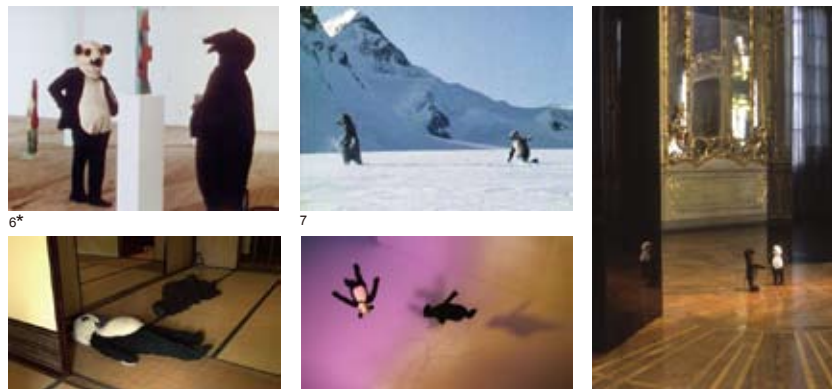


子猫が皿のミルクをひたすらなめている。途中、ふと皿から顔を上げ、しばらく正面をじっと見つめるが、また皿に戻り、ミルクを飲むという行為にふける。日常の風景が切り離され、展示台の上のテレビモニターで再現される作品。

5*
《子猫》2001
ビデオ 6分
ビデオ・スチル

展示室 7-8

ネズミとクマ



フィッシュリとヴァイスの活動の初期から「ネズミ」と「クマ」が登場する。最初の映像作品《ゆずれない事》(1980-81)で、ネズミとクマは芸術でひと儲けを企むが殺人事件に巻き込まれる。さんざんな目に遭いながら、ネズミとクマは社会システムを独自に解読し始める。続く作品《正しい方向》(1982-83)での彼らは、知性と野心を備え、自然界で生きる術を模索する。この2作品に登場した大きなネズミとクマは今、キャビネットの中に陳列される。小さなネズミとクマは、バロック様式の宮殿や日本庭園を巡る。天井からつり下げられ空中を浮遊するネズミとクマはカラフルな光と煙の奥へと消える。

6*
《ゆずれない事》1980-81
16ミリフィルム 30分
フィルム・スチル
camera: Jürg V. Walther

7
《正しい方向》1982-83
16ミリフィルム 55分
フィルム・スチル
camera: Pio Corradi

8*
《庭園にて》2008-10
ビデオ
ビデオ・スチル

9*
《無題 (モビール・ビデオ)》2009
HDV 30分
フィルム・スチル
camera/ montage: Jason Klimatsas

10
《あるネズミとあるクマの映画の一部》
2008/10
3チャンネルのビデオ・プロジェクト
HDV 9分20秒、13分33秒、30分11秒
フィルム・スチル

1980年代前半の映像作品ではフィッシュリがネズミ、ヴァイスがクマ(実際はパンダ)に扮した。アーティストの分身とも見受けられるこの「ネズミ」と「クマ」は、冊子の中にも、立体作品としても現れる。近作に登場する小柄なネズミとクマは、別次元からやって来て、この世界を探っているかのようなようでもある。「ネズミ」と「クマ」の存在は作品ごとにますます複雑化している。

通路空間

「グレイ・スカルプチャー」

11
《管》1986
ポリウレタン、布、彩色
H40 x L180 x D70 cm

12*
《動物》1986
ポリウレタン、布、彩色
H50 x W70 x D87 cm



11



12*

「グレイ・スカルプチャー」はポリウレタンを用いて形作られた彫刻。《家具付きアパート》、《管》、《平衡器官》は全て内部空間を意識した作品である。作品《動物》は、種類を特定できない、抽象的な動物の概念を示している。目、耳など体には開けられた穴は、内部空間への窓である。

通路空間

「均衡」

13*
《哀愁、憧憬、戦略》（「均衡」より）1984/85
写真

14*
《ピラミッドの秘密》（「均衡」より）1984/85
写真

15*
《無法者》（「均衡」より）1984/85
写真



13*



14*



15*

タイヤ、椅子、靴、ブラシ、フォーク、キッチン用品などが危うげなバランスでたたずむ。本シリーズは、静止状態を保つことのできない形を写真に留めることにより「つかの間の彫刻」として永続性を持たせている。重力とバランスにより危うく立つ姿が、観る者の感情をゆさぶる。各作品には、《ピラミッドの秘密》、《無法者》などのタイトルがつき、物語性が強い。

展示室 9・10

《事の次第》
《事の成り立ち》

16*,17
《事の次第》1986-87
16ミリフィルム 30分
フィルム・スチル

18*
《事の成り立ち》1985/2006
DVD
フィルム・スチル
camera: Patrick Frey



16*



17



18*

「均衡」シリーズの制作から着想を得た作品。ゴミ袋、タイヤ、梯子、ペットボトルなどの空の容器、風船、椅子、モップ、車輪のついた簡素なオブジェ——重力、遠心力、水力、化学変化によって引き起こされる発泡、煙、火等によりドミノ倒しのように、次から次へとエネルギーを伝えていく。現象のみで紡がれた物語には人の気配は一切排除され、あたかもガラタひとつひとつが能動的にひとつの方向に向かってエネルギーを伝えようとしているかのようである。《事の成り立ち》は、《事の次第》の制作にあたり、このエネルギーのつながり一つ一つをフィッシュリとヴァイスが綿密に、時間をかけて創作する姿を捉えたドキュメント映像である。

展示室 9・10

《音と光 - 緑の光線》

19*
《音と光 - 緑の光線》1990
フラッシュライト、ターンテーブル、
プラスチック製のコップ、接着テープ
H16 x W25 x D40 cm



19*

ディスプレイ用のターンテーブル、使い捨てのプラスチック製のコップ、野外携帯用のランプといった既製品の組み合わせによる機械仕掛けの彫刻。ターンテーブル上のコップに光が当てられ、その回転により、不規則に変化し続ける光のムーヴィング・イメージが立ち現れる。

光庭

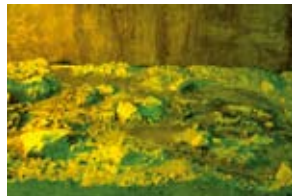
《無題 (コンクリート・
ランドスケープ)》

20*
参考写真
【制作中のコンクリート・ランドスケープ】

21
参考写真
【コンクリート・ランドスケープ、スタジオにて】



20*



21

「風景をどのようにして表現するか」という取り組みのひとつ。コンクリートと手作業で成形された「風景画」は、雨、光を受けることで、それ自体が自然界の現象そのものをも映し出す風景となる。

展示室 11

《エアポート》

22*, 23
《エアポート》1987-
Cプリント
各H160 x W225 cm



22*



23

1987年以降、世界各地を移動する中、空港を撮影した作品。現在も進行しているプロジェクト。異なる文化圏にありながらも共通に機能する空港の均質さ、飛行機から垣間見える各国のアイデンティティ、夜の光、雨のしずく、窓越しに見る空港の情景の豊かさが映し出されている。

展示室 11

《不意に目の前が開けて》

24

参考写真

『I can't get no satisfaction』の作曲を終え、満足しながら家に戻るミック・ジャガーとブライアン・ジョーンズ
 (《不意に目の前が開けて》より)

1981 粘土

Collection Emmanuel Hoffman Foundation



24



25



26

25

参考写真

『よくある逆さま語：内と外』
 (《不意に目の前が開けて》より)

1981 粘土

Collection Emmanuel Hoffman Foundation

26

参考写真

『パン』(《不意に目の前が開けて》より)

1981 粘土

Collection Emmanuel Hoffman Foundation

おとぎ話、テクノロジー、近代化、スポーツ、映画、聖書、自然、エンターテインメント、作家個人の生活の一場面——人類そして地球の歴史上の様々な出来事を粘土で再現した作品群。細部まで丁寧に作られたものから荒くスケッチのように留められた像約90点は想像のイメージを形にしている。アーティストの主観が生み出したこの世の出来事が織りなすパノラマは、作家が最初に想定したタイトルの『the world we live in(私たちが住む世界)』から読み取れるように、この世の大小様々な事柄から「生きること」を問う。本作品は、1981年に約200点のオブジェから成るインスタレーションとして発表された後、2006年に約90点からなるヴァージョンとして新たに発表された。本展覧会では新しいヴァージョンが展示される。

展示室 12

ポリウレタンによる
オブジェ

27

参考写真



27

フィッシュリとヴァイスは1980年初頭よりポリウレタンを用いた作品を制作し続けている。作業場や作家のスタジオにあるようなオブジェを手で精巧に象り、彩色を施して本物同様に再現する。工具、タイヤ、日用品等のオブジェにより構成されたインスタレーションは、その場所に住むあるいは使用する人の存在を漂わせる。また、物体としての存在感に圧倒されるが、その物質感と雑然とした様相の中に、もろさとはかなさを秘める。

通路空間

「ソーセージ・シリーズ」

28*

《絨毯屋にて》

(「ソーセージ・シリーズ」より)
 1979 カラー写真、24 x 36 cm

29

《山の中》

(「ソーセージ・シリーズ」より)
 1979 カラー写真、24 x 36 cm

30*

《ファッション・ショー》

(「ソーセージ・シリーズ」より)
 1979 カラー写真、24 x 36 cm



28*



29



30*

フィッシュリとヴァイスが最初に共同で制作した作品。冷蔵庫の中、洗面所、ベッド、バスタブを舞台に、ソーセージやハムのスライス、吸いかけのタバコ等を用いて、火事、山の一場面、交通事故、歴史的な事件を形にしたもの。再現された世界の物語性と用いられた素材自体の即物性の併置から、表現の在り方を模索する作家の姿勢が伺える。

通路空間

《フォトグラフィア》



31*



32*

31*, 32*

《フォトグラフィア》2004/05
 白黒写真
 各 10 x 15 cm

ポストカードサイズの紙に映るのは花、波、機関車、道化師、女、食べ物、風景、都市、村落、宇宙、南洋の海賊、動物。一見すると描かれた絵に見えるこれらのイメージは、クローズアップ、モノクロ、そして露出を変えることで、既存のイメージに異なった世界を映し出した写真である。ひとつの対象に焦点を定めた手法を以て世界を全網羅しようとする作家の姿勢と、目に見える事象から不可視な内奥・社会心理を映し出そうとする試みが伺える。

展示室 14

《質問》



33*

33*

参考写真

《無題(質問)》2003
 第50回ヴェネチア・ヴィエンナーレでの
 展示風景(2003)

「街を治めるのは誰だ?」「銀河はどこへ向かうのだろうか?」「我々は自分の意見と共に生きていかなければならないのか?」など身の回り些細なことから哲学的なものへと及ぶ問いが、止むことなく空中を漂う。10台以上のスライド・プロジェクターにより現れるこれら数々の問いは、観る／読む者に答えを出す間を与えず消えては新たな問いへと止む事なく移り変わり、同時多発に現前する。このような世界や人間心理を問う「質問」は、1981年制作の映像作品《ゆずれない事》の最後のシーンで主人公のネズミとクマが社会システムを図式化し、実際、冊子として発表された《秩序と清潔さ》(1981)の中に現れる。その後、ポリウレタンで成形された大きな壺型の作品《質問の壺(大)》(1986)では、内側全面に渦状に質問が書かれる。また、2002年には『幸せは僕を見つけてくれるかな? (Findet Mich Das Glück?)』という書物となる。質問は現在も増え続けている。

※解説:北出智恵子

※広報用画像の掲載にはいずれも下記クレジットの明記が必要です。各画像のキャプションとともに必ずご表示ください。

© The artists. Courtesy The artists; Galerie Eva Presenhuber, Zürich; Sprüth Magers Berlin/ London; Matthew Marks Gallery, New York